



Osaka Gakuin University Repository

Title	革新的企業家における「老い」の研究－広瀬幸平と伊庭貞剛を中心にして－ A Study of Hirose Saihei and Iba Teigo in the Latter Half of Life: Focusing on the Idea of Aging
Author(s)	瀬岡 誠 (SEOKA MAKOTO)
Citation	大阪学院大学 国際学論集 (INTERNATIONAL STUDIES), 第 22 巻第 2 号 : 1-26
Issue Date	2011.12.30
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

革新的企業家における「老い」の研究 — 広瀬宰平と伊庭貞剛を中心にして —

瀬 岡 誠

A Study of Hirose Saihei and Iba Teigo in the Latter Half of Life: Focusing on the Idea of Aging

SEOKA MAKOTO

ABSTRACT

From the point of view of entrepreneurial history, this paper discusses, based upon the idea of "the variety of aging", how each of the two innovative entrepreneurs of the Sumitomo Zaibatsu—Hirose Saihei and Iba Teigo—tried to grasp the meaning and significance of aging in "the latter half of life".

We take two essays as a clue to this problem; the first one is "Longevity is the Source of the Energy of a Nation" (「寿者国家之元氣也」), written by Hirose after his retirement, and the second is "Youthfulness and Maturity" (「少壯と老成」), written by Iba just before his retirement.

These essays tell us, implicitly or explicitly, what Hirose and Iba thought about the meaning of their own retirement and its significance in their whole life, as well as the role of old people, after each experienced their own particular retirement process and became "an old man".

Consequently, it is pointed out that a general picture of old people that Hirose described had a very active nature, with some positive and aggressive aspects, which could be symbolized by his phrase,

“Longevity is the Source of the Energy of a Nation,” whereas the image of old people that Iba described was rather passive, accompanied by some feelings such as tolerance and generosity, which could be symbolized by his remark, “Older people should not interfere with young people's activities.”

Finally, a story told to Hirose by Hashimoto Gazan, who was Hirose's master of Zen as well as one of his friends, is introduced to this discussion, and we argue about what Gazan's view of old people was like.

はじめに

本稿は、近代住友のふたりの経営者、広瀬宰平（初代総理事）と伊庭貞剛（二代総理事）が、引退という、ライフ・ヒストリーにおけるもっとも重要な転換点のひとつを通過して、まさに「人生の後半」を歩み始めた頃、引退後における社会的役割の変化や「老い」についてどのように考えていたのかということ、「老いの多様性」¹⁾を前提として、企業者史のパースペクティブに基づいて論じたものである²⁾。

広瀬と伊庭には、当然ながら、出自や住友入りの経緯、トップの経営者として活躍した歴史的・社会的状況など、いくつかの相違点がある³⁾。しかし、人間広瀬宰平、人間伊庭貞剛のライフ・ヒストリー全体を分析対象とする企業者史のパースペクティブから両者の「人生の後半」に焦点をあてる場合、とくに注目すべき点は、両者の引退の仕方が大きく異なっていたということである。

- 1) 本稿における「老い」とは、生物学的な機能衰退としての老化の意味を含みつつ、人間ひとりひとりがそれをどのように受け止め、対処していこうとするのかという人間学的な概念としてとらえられている。ある特定の時代や社会、文化の中で、人間が「老い」をどのように生きるかというその生き方は実に多様である（老いの多様性）。「老い」については、日野原重明「老いの意味するもの—老いの問題」（伊藤光晴他編『老いの発見2 老いのパラダイム』岩波書店、1986年、11-38頁）、鶴見俊輔「生き方としての老い」（伊藤光晴他編『老いの発見3 老いの思想』岩波書店、1987年、11-37頁）などを参照。
- 2) 広瀬宰平や伊庭貞剛の「人生の後半」を企業者史のパースペクティブから論じたものとして、瀬岡誠『近代住友の経営理念』（有斐閣、1998年）、同「広瀬宰平の企業者史的分析—後半生を中心として—」（『大阪学院大学通信』第32巻第4号、平成13年7月）、同「伊庭貞剛の企業者史的研究—社会的基盤的分析—」（『大阪学院大学国際学論集』第12巻第2号、2001年12月）とくに134頁以下、瀬岡誠・瀬岡和子「広瀬宰平の企業者史的研究—引退前後の意識と行動を中心にして—」（『同志社商学』第63巻第5号、2012年3月、84-135頁）などを参照されたい。
- 3) 広瀬と伊庭の主要な相違点として、まず第一に、出自の違いについてみてみよう。広瀬は文政11年（1828）5月、近江国野洲郡八夫村（現、滋賀県野洲郡中主町）の旧家北脇理三郎の次男として生まれた。理三郎は博く書物を読み、医術にも詳しくあったといわれる。一方、伊庭は弘化4年（1847）1月、近江国蒲生郡西宿（現、滋賀県近江八幡市西宿町）に、代官伊庭正人の長男として出生した。武士階級出身である。なお、広瀬は伊庭の叔父（伊庭の母多鶴子は広瀬の実姉）にあたる。

広瀬も伊庭も、「自利利他公私一如」という住友の事業精神を堅持し、国家社会への貢献を中核に据えつつ、別子銅山の近代化ならびに住友家事業の多角化を強力に推進した革新的企業家であるという点ではおおむね共通しているにもかかわらず、住友のトップ経営者としてどのように引退していくか、人生の前半の最後の一步をどう締めくくるのかという点において、全く対照的であったのである。

広瀬は、日清戦争最中の明治27年11月、11歳（天保9年）の時から57年間務めた住友家を「依願退職」した。それは、自主的な引退というよりもむしろ、実質的には、大島供清ら住友内部からの広瀬幸平弾劾追放運動の高まりを背景とした、住友家からの追放すなわち住友家の事業経営に対す

第二に、住友入りの経緯の違いについてみると、広瀬は、天保9年、11歳の時、叔父北脇治右衛門（当時別子銅山支配人）に伴われて別子に行き、別子銅山勘場で奉公しはじめ、別子銅山支配人（慶応元年、38歳）から総理事（明治10年、50歳）へと昇進した。北脇治右衛門は広瀬の少年時代の「重要な他者」であった。子飼いの奉公人から出発した広瀬は、やがて採鉱現場を熟知する鉱山技術者として、またトップの経営者（総理事）として、57年間、住友家7代の家長（第9代友聞から第15代友純まで）に仕えたのである。彼の理念の中心は、住友家への深い忠誠心であり、同家の存続と発展を前提とした国家社会への貢献というものであった。

これに対して、伊庭は、維新後およそ10年に及ぶ司法官時代を経て、明治12年、33歳のとき、官界の退嬰主義的風潮への反発や叔父広瀬幸平の勧めもあって、実業界＝住友に入り、早くも翌年には大阪本店支配人に就任した。青年時代の準拠人であり平田門国学の師でもあった西川吉輔（干鯛問屋を商う近江商人）の人格的・思想的影響を強く受け、「国忠のこころざし」の重要性を内面化した伊庭は、明治国家への忠誠心あるいは明治天皇が發布した五箇条の誓文への深い帰依に基づき、住友を通じて国家社会に貢献するという理念を持ち続けた。

第三の相違点は、当然ながら、両者の活躍した時代的背景（歴史的社会的状況）が異なるということである。広瀬が「真正カリスマ」として革新的企業者活動を展開するのは、幕末から明治10年前後にかけてである。すなわち、幕末維新の激動期にカリスマのリーダーシップを発揮して主家存亡の危機を救い、別子銅山近代化起業方針（明治9年）を確立し、着実に実行していった。明治20年代前半、とりわけ明治22年の欧米巡遊後は、国家的事業としての製鉄事業や硫酸製造事業に採算を度外視して情熱的に取り組んだものの、広瀬自身のカリスマの日常化の進行とその独断専行的経営に対する大島供清らによる激しい非難によって、日清戦争中の明治27年11月、引退を余儀なくされた。

これに対して伊庭が住友のトップの経営者として活躍するのは、広瀬引退の明治27年から伊庭自身の引退する同37年までの10年間、すなわち、日清戦争勃発から日

る広瀬の影響力の排除という意味をもっていた⁴⁾。

これに対して、伊庭は、日露戦争最中の明治37年7月、伊庭体制を支えたふたりの理事（河上謹一と田辺貞吉）とともに自主的・主体的に引退した。15代家長住友友純は、トップ経営者3名の同時引退が「少壮有為者のために進路を開かう」という意図にあったことに感銘したと述べている。伊庭の出処進退の見事さ、潔さとして高く評価されるゆえんである⁵⁾。

こうした全く対照的な両者の引退の仕方が、「古い」についての彼らの考え方の違いと何らかの関係があるのではないかという問題意識のもとに、両者の引退ないし引退前後の行動を、「人生の後半」の側から、「古い」や老人の役割に関わる問題として捉え直してみたい、これが本稿執筆の動機である。

露戦争開戦に至るまでの10年である。周知のように、日本では、日清戦争前後から製糸・紡績業を中心に第一次産業革命が進行し、日露戦争前後には重工業を中心とした第二次産業革命が進行したが、同時に他方では、足尾銅山鉱毒事件など深刻な社会問題が顕在化した。伊庭は、金属工業や銀行業への進出を決断する一方で、新居浜煙害問題の根本的解決として製錬所の四阪島移転の断行や別子植林事業にも積極的に取り組んだ。つまり、伊庭は、日本の産業構造がその負性を顕在化させつつ大きく転換していく時期に住友のトップの経営者となった人物である。

以上の点については、広瀬宰平『半世物語』（復刻版、住友修史室編纂発行、1982年、以下『半世物語』と略記する）、広瀬満正『宰平遺蹟』（広瀬満正発行、大正15年12月）、瀬岡誠、前掲『近代住友の経営理念』第2章及び第3章、同「伊庭貞剛の企業者史的的研究—準拠集団と西川吉輔の分析—」（『大阪学院大学 国際学論集』第13巻第1号、平成14年6月）、同「伊庭貞剛の意識と行動—環境問題への取り組み—」（徳永光俊・本多三郎編『経済史再考 日本経済史研究所開所七〇周年記念論文集』大阪経済大学日本経済史研究所、平成15年5月）、同、前掲「広瀬宰平の企業者史的的分析—後半生を中心として—」などを参照。

- 4) 広瀬の引退過程の詳細については、瀬岡誠・瀬岡和子、前掲論文、86-100頁および『住友春翠』編纂委員会編纂・発行『住友春翠』（1955年、以下『住友春翠』と略記する）239-261頁を参照。
- 5) 『住友春翠』432-435頁。伊庭の引退観は「晩成」ではなく「晩晴」の境地をめざす彼自身の生き方と不可分にむすびついていた。瀬岡誠・瀬岡和子、前掲論文、130頁以下を参照。伊庭は、「事業のために人生の存在する如く思惟する功利的見解」（晩成）ではなく、「あくまで人生そのものを第一義とし、事業を以て単に人生を成就するの手段に過ぎずとする」思想（晩晴）に基づき、「老」に満足し「老」をよるこぼその境地をめざしつつ、人生の後半を生きたのである。西川正治郎編『幽翁』（栃原孫蔵発行、1931年、以下『幽翁』と略記する）235頁以下。

たしかに、ある時代のある経営者の引退行動について考察する場合、その人物の具体的な事業経営活動とそれを支えた経営理念、さらには時代背景（歴史的・社会的状況）などに焦点を当て、その分析を通して、いわば「人生の前半（上りの過程）」の側から検討していくことは重要である。しかし、その人物のライフ・ヒストリー全体＝人生全体のなかに引退というライフイベントを位置づけるためには、そうした分析を踏まえた上で、今一度、「人生の後半」の側から、「老い」をめぐる問題のひとつとしての引退行動を捉え直す必要があるように思われるのである。そうして初めて、その人物が「老い」とどのように向き合い、どのように「個性化の過程」⁶⁾ (C.G. ユング) を歩んでいったかが視野のなかに入ってくるであろう⁷⁾。

この問題にアプローチする際の有効な手がかりとして筆者が注目しているのは、広瀬と伊庭がそれぞれ引退前後に書き記した「老い」についての文章である。すなわち、引退して3年後の明治30年、70歳になった広瀬が書いた「寿者国家之元氣也」⁸⁾という一文と、引退数ヶ月前の明治37年2月、58歳の伊庭が雑誌『実業の日本』（明治37年2月15日号）に発表した「少壯と老成」⁹⁾という一文である。

6) 河合隼雄『ユング心理学入門』（培風館、昭和42年）によれば、ユングのいう「個性化の過程」とは、「自己実現の過程」とも呼ばれ、人生の究極の目的である。それは、「個人に内在する可能性を実現し、その自我を高次の全体性へと志向せしめる努力の過程」のことである（同書、220頁）。自己実現の過程といっても、「一つの静止した到達点」があるわけではない。自己実現とは「つねに発展してやまぬ過程であり、その過程そのものに大きい人生の意義がある」のであるが、それには「危険性と苦しみ」が伴うことを知らねばならない（同書、227-228頁）。なお、ユングの「自己」概念や「心の全体性」、意識の中心としての「自我」については、同書、第9章および樋口和彦『ユング心理学の世界』創元社、昭和53年、54-62頁、125頁以下を参照。

7) この点について、すでに筆者は「人生の後半」の意義と重要性を強調するユング心理学と企業者史学の接合の可能性と有効性を指摘し、伊庭貞剛とその心友河上謹一のそれぞれの引退後のライフスタイルとそれを支えた精神構造をユングのいう「個性化の過程」に基づいて論じている。瀬岡誠、前掲『近代住友の経営理念』第3章伊庭貞剛、とくに98頁以下を参照されたい。

8) 広瀬宰平「寿者国家之元氣也」（広瀬満正、前掲『宰平遺蹟』附録「偷間樂事以後之詩及文」の部所収）。

本稿の目的は、そこで展開された老人の役割についての両者の議論の内容を検討し、あわせてそれが執筆された背景とその意味について考察することである。すなわち、広瀬と伊庭が、それぞれ人生における「上りの過程」から「下りの過程」へのまさに過渡期にあるとき、換言すれば、それまでのいわゆる職業生活とは全く異なる生活へのドラスティックな移行を体験しつつあるとき、「人生の後半」における老人の役割や「老い」の意味をどのように考えていたのかについて検討することである。

この作業は、ある人間のライフ・ヒストリーの全体を分析の対象としている企業者史においては、きわめて重要である。なぜなら、人生の前半における革新的企業家としての広瀬や伊庭のみならず、人生の後半におけるひとりの老人としての広瀬や伊庭をも、ひとりの人間として分析対象に組み入れていくことが、筆者のめざす企業者史学であるからである。

I 広瀬の老人論

1 「寿者国家之元気也」における広瀬の主張

まず広瀬が老人の役割について述べた一文「寿者国家之元気也」を取り上げ、引退後、「人生の後半」を歩み始めた広瀬が「老い」についてどのような意識をもっていたかを見てみよう。なお、当時の日本人男性の平均寿命は42歳くらい¹⁰⁾であったので、70歳の広瀬はすでにかかなりの長寿であったといえる。

さて、広瀬は冒頭において「老者」＝「寿」のポジティブな面を次のように強調する（なお、引用文中の強調はすべて筆者による）。

「寿は国家の元気なり、何を以て之れをいふ、曰く人壮なれば気鋭

9) 伊庭貞剛「少壮と老成」（『実業の日本』第7巻第4号、明治37年2月15日、全文は、末岡照啓編『広瀬宰平と伊庭貞剛の軌跡』（新居浜市広瀬歴史記念館・住友グループ広報委員会、平成17年）79-80頁に収録されている。

10) 厚生労働省のホームページ（<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/19th/gaiyo.html>）における「表2完全生命表における平均余命の年次推移」を参照した。ちなみに、同表によると、明治32年-36年における男子の平均余命は、65歳男子がおおよそ10年、80歳男子がおおよそ4年であった。

にして、進歩の性質に富めども、自から経験注意に乏しきを免がれざれども、老者（以下或は老者と云ひ或は寿と云ふも同一の意味なり）は之に反し、鋭気壯心或は一籌を壯者に輸すべきも、経験に富み注意足り且つ耐忍の力を有す」¹¹⁾

さらに、広瀬はいう。

「老齡大臣は其の学識に於いて、或は第二流政治家に遜るものあらんも、老練耐忍能く時局の困難に處す、是に由て之れを觀れば、人生百事寿にあらずんば能はず、顔子の賢も不幸短命にして死すれば則ち休む、故に曰く寿は国家の元氣なりと」¹²⁾

70歳の広瀬は、まず、壯者が「気鋭にして、進歩の性質に富」むのを認めるものの、老者（寿者）は経験、注意、忍耐力の点で前者にまさっていることを強調している。広瀬によれば、「漢家三傑の随一」といわれる張良が博浪沙で秦の始皇帝に鉄槌を投げて暗殺を謀り失敗したのは、「年少の瑕瑾」（若さがもたらす欠点）の故に外ならない。他方、普仏戦争において、プロシアの老齡の王ウィルヘルム1世および、二老ビスマルク宰相とモルトケ將軍がフランスのナポレオン3世を敗ったのは、まさに「寿の勝利」である。

次に、広瀬は、国家の發展のために老人は長寿でなければならぬと述べる。いわく、豊臣秀吉が徳川家康ほど長命すれば、さらに活躍したであろうし、家康がもし秀吉ほどの寿命しかなければ、徳川15代の基礎を築くことはできなかったであろう。また、孔子の優れた弟子のひとり願子（願回）の賢さも、夭折してしまえば、それまでである。したがって、「寿は国家の元氣なり」なのである。

広瀬は、「寿は国家の元氣なり」「老練の功」「寿の勝利」「寿の賜」を例証するために、実に世界の歴史上有名な「長命の士人」126名を、長命の順（91歳から59歳まで）に列挙する。たとえば、日本画家の（菊池）容齋（91歳）、親鸞上人（90歳）、北条早雲（88歳）、ガリレオ（79歳）、徳川家康（75歳）、孔子（73歳）、上杉鷹山（72歳）、ワシントン（68歳）、豊臣秀

11) 広瀬幸平、前掲「寿者国家之元氣也」1頁。

12) 同上、6頁。

吉 (63歳)、空海 (62歳) など、である¹³⁾。

ここではじめて広瀬は、予想されうる反論—頼山陽や左甚五郎、狩野正信など、短命であっても高い業績を残している人がいるので、「才芸」と寿は無関係であるという反論—に言及し、ここまでの、やや強引な議論展開の修復をはかろうとする。しかし、この反論に対しても、短命の大家が長寿を得たならば、「その造詣するところしるべからず」と一蹴し、次のような自説を展開する。

「英雄豪傑も寿ならずんば風雲際会に乘じ、以て驥足を展すこと能はず、大家名匠も寿ならずんば満腔の経綸を實地に施し、或は稀世の手腕を揮ふこと能はず、国家の安危榮辱は一に白髮頭顱の上に係る、然らば則ち之れを国家の元気なりといふ毫も不可なし、聞く欧米文明国に在ては、老者は活歴史なりと称し、頗る尊敬優待すと、老生は一步を進めて老者は国家元気の精華なりと断言するを憚らず。今や社会人文は日一日より進歩し頻繁となり、精神の過労働もすれば健康を害ひ、不幸短命にして死するもの多く、人生七十古来稀の語は一變して人生六十即古稀の嘆なき能はず、故に苟くも忠君憂国の士は自から不老長生の道を講じ、兼て国家元気の精華を發揮せざるべからず、長命すれば辱多しなど唱ふるは、絶望的の遁世主義より出たる謔語にして取るに足らず、偶ま老生の自説を記し知己諸君に質さんと欲す、顧みれば老生も馬齡正に七旬、之れを読んで自から為にするとところあるものとなさば、老生の知己にあらず、亦た国家元気の何ものたるを解せざるものなり」¹⁴⁾

広瀬は、経験、注意、耐忍という点での壮者に対する老者の優位を唯一の論拠として、「国家の安危榮辱」はひとえに老者その「国家元気の精華」を發揮するかどうかにかかっていると述べて、老人の役割の重要性を一貫して強調している。そして、引退して3年、70歳 (古稀) となった老人広瀬は、長命は決して不名誉なことではないのであって、「不老長生の道」に励んで国家のために尽くすことが、「忠君憂国の士」の務めである

13) 同、2-6頁。

14) 同、14-15頁。

と結論づけるのである。

2 「寿者国家之元気也」執筆の意味

以上見てきたように、広瀬の求める老人のイメージは、引退後も不老長生につとめ、国家社会に貢献する老人、あるいはその気概を失わない老人であった。引退後も、総理事時代と同様、彼に固有の忠誠心（「逆命利君謂之忠」）を持ち続けた広瀬は¹⁵⁾、社会における「老」の役割をきわめてポジティブかつアクティブに捉える老人論を展開した。そして、長命は辱と考えるような「遁世主義」を批判したのである。

では、なぜ、広瀬は明治30年というこの時に、このような老人論を展開したのであろうか。広瀬にとって「寿者国家之元気也」を書くことは、どのような意味をもっていたのであろうか。

まず第1に考えられるのは、住友引退後、ひとりの老人となった広瀬が、総理事時代の英雄的・救世主的自己イメージ（＝住友の種子蒔権兵衛）に代わる、新たな肯定的自己イメージ（＝忠君憂国の士として国家社会に貢献するという気概を失わない老人）を再確立しようとしたのではないかということである¹⁶⁾。

その大きな契機となったのはなにか。企業者史のパースペクティブからは、製錬所の四阪島移転断行という「一大事件」の発生（明治30年）を見過ごすことはできない。明治29年3月、広瀬は、住友を引退した自分に「容喙（喙）ノ権」などないと自覚しつつ、新居浜煙害問題の解決案として後継者伊庭の提示した製錬所の四阪島移転案に真っ向から強く反対した。住友時代の成功体験がもたらした絶対の自信と自負、それに基づく英雄的・救世主的自己イメージを背景に、「逆命利君謂之忠」「知て言ハサルハ不忠之レヨリ大ナルハナシ」という彼に固有の忠誠心から家長住友友純に「具陳書」および「副書」を提出して損害賠償案の合理性や妥当性を論じ

15) 広瀬は死の前年（大正2年、86歳）にも「逆命利君謂之忠」と揮毫している。広瀬満正、前掲『宰平遺蹟』巻頭図版。

16) 広瀬宰平の住友時代における自己イメージについては、瀬岡誠・瀬岡和子、前掲論文を参照されたい。

たのである¹⁷⁾。これに対して、伊庭は同年9月、広瀬の反対論にひとつひとつ答えるかたちで「四阪島移転之義ニ付上申書」を家長友純に提出した。結果的に、広瀬の損害賠償案は採用されず、明治30年2月には四阪島製錬所の建設が始められたのである（明治37年竣工）。

この四阪島移転断行事件は広瀬の「人生の後半」における、特筆すべき重大な出来事であり、それが引退後の広瀬の意識に与えたであろう大きな衝撃を軽視することはできない。というのも、この事件は、引退し、人生の後半を歩み出した広瀬に、自分がかもはや、住友の英雄でも、救世主でも、種子蒔権兵衛でもないということ、そして、そうした役割を遂行することを期待されていないということ、引退後おそらく初めてはっきりと自覚させる事件であったといえるからである¹⁸⁾。

言い換えるならば、この事件は、住友の事業経営方針に対する彼のかつての影響力＝権力の急速な衰退という現実を突きつけるものにほかならなかったからである。住友家の「種子蒔権兵衛」という呼称に象徴されるところの、広瀬の自信に満ちたポジティブな自己イメージ＝英雄的・救世主的自己イメージに深い亀裂が走ったのは、おそらくこの時であったと思われる。

住友を引退し総理事という社会的・経済的地位（＝「社会的アイデンティティ」¹⁹⁾）を喪失した広瀬は、住友時代の「自己アイデンティティ」（＝種子蒔権兵衛）の問い直しと調整という、葛藤と苦痛をとまなう困難

17) 広瀬は「具陳書」の末尾において、「今や退隠シ容喙（喙）ノ権ナシト雖、此一大事件黙視スルニ忍ヒス、知テ言ハサルハ不忠之レヨリ大ナルハナシ、敢テ尊嚴ヲ冒瀆シ、御家ヲ思フノ余リ、満腔ノ精神ヲ吐露シ、卑見ヲ具陳ス」と述べている。なお、広瀬の「具陳書」および「副書」、伊庭の「上申書」は、末岡照啓編、前掲「広瀬宰平と伊庭貞剛の軌跡」73-79頁に全文収録されている。

18) 瀬岡誠・瀬岡和子、前掲論文、129頁。

19) 発達心理学に「アイデンティティ」概念を導入したE.H.エリクソンは、青年期（＝子供から大人への移行期）を「アイデンティティの危機」ととらえた。その危機は、個人の自己アイデンティティと社会的アイデンティティのずれとしてあらわれるという。青年期は、アイデンティティ再編の時期であり、個人がこのずれを調整しアイデンティティの統合を図っていかねばならない時期である。E.H.エリクソン『アイデンティティ—青年と危機』岩瀬庸理訳、金沢文庫、1975年。

な課題に直面し、それに取り組むべく「寿者国家之元気也」を書いたのではないか、そして、そのなかで「古い」の意味と老人の役割についての独自の議論を展開したのではないかと考えられるのである。広瀬は、「向老期」（上野千鶴子）における「アイデンティティの危機」を、肯定的かつポジティブな老人イメージの確立とそれへの同一化によって乗り越えようとしたのである²⁰。「寿者国家之元気也」が、自己を鼓舞するような、したがって多少とも強引な議論展開となっている理由のひとつはそこにあるように思われる。

以上要するに、伊庭による製錬所の四阪島移転断行は、それに反対していた広瀬に「権力の衰退」を実感させると同時に、他方では、自らの「古い」という問題に真正面から向き合うチャンスを与え、結果的に、「向老期」におけるアイデンティティ再編という課題にすみやかに取り組ませるきっかけとなったのである。土井健司が述べているように、「古いの問題」とは、結局、「死への接近」よりもむしろ、「さまざまな自らの力というものの衰退」という問題に集約していくからである²¹。

こうして、広瀬は、「住友の総理事＝種子蒔権兵衛」ではもちろんなく、「終身分家ノ上席ニ列シ前職ノ資格ヲ以テ礼遇」される「元総理事」でもない、人生の後半を生きていくための新しいアイデンティティを模索し再

20) 上野千鶴子は、青年期（子供から大人への移行期）をアイデンティティの危機と捉える E.H. エリクソンの理論を手がかりに、それを「向老期」（大人から老人への移行期）にも適用し、この時期が青年期同様、アイデンティティの危機であり、個人はアイデンティティ再編という困難な課題を達成しなければならないと論じている。詳しくは上野千鶴子「老人問題と老後問題の落差」伊藤光晴他編、前掲『古いの発見 2 古いのパラダイム』111-138頁を参照。本稿における広瀬の「向老期」とは、引退後、彼に固有の、「老人としてのポジティブな自己イメージ」（老書生）を獲得していく過程のことである。

21) 土井健司「共在的主体性の回復に向けて」（『現代思想』第30巻、第7号、221-235頁）221-222頁。土井によれば、老年とは「死への接近」と「さまざまな力の衰退・衰弱」という意味において、ひとつの「傾斜の時期」であるといえる。ただし、死への接近は、老年期に特有の問題ではない。人間は、誕生の時から死と向かい合っているからだ。結局、古いの問題は、実行力や行動力、経済力などを含む「さまざまな自らの力というものの衰退」という問題に集約していくのである。

編していくその過程において、「寿者国家之元気也」を書き上げたのである。そのさい、自分とは何か（自己アイデンティティ）を問い直した広瀬の脳裏に最初に浮かんだのは、住友時代の57年間、彼の意識と行動の核として存在した、彼に固有の忠誠心以外の何ものでもなかったのである²²⁾。忠君憂国の士として不老長生に励む「一老人」、これこそ、「向老期」にある広瀬が到達した自己アイデンティティであったのだ。

このように見てくると、「寿者国家之元気也」という一文は、現役時代から彼を支えてきた、彼に固有の忠誠心の存続を確認するために書かれたという側面も否定できないであろう。身体的・生物学的な「老い」から免れることは難しいとしても²³⁾、「心の老化」²⁴⁾とは未だ無縁であることを、70歳（古稀）になった広瀬自身が改めて自己確認しておきたいと考えたのではないか。これが、筆者の考える、「寿者国家之元気也」執筆のもう一つの理由であり、意味である。

以上、アイデンティティ概念に依拠しつつ、企業者史の視点から広瀬の「寿者国家之元気也」執筆の意味を探ってきたが、東洋における老いという視点から、次のように考えることもできる。すなわち、S. リンハルトによれば、東アジアにおける老いの哲学では、孔子の言葉に典型的に表れているように、「常に前進する思想、各年齢に応じて理性的に有意義に生きる思想」が強調され、ヨーロッパ文学に見られるような「老いを嘆き悲

22) たとえば、総理事時代の広瀬は、製鉄業や硫酸製造事業への情熱的ともいえる取り組みに見られるように、大島供清らによる宰平追放運動に遭遇しても、「逆命利君謂之忠」という、彼に固有の忠誠心に基づき、住友家のみならず、国家社会への貢献を理念の中核において企業者活動を展開した。ただし、この忠誠心が、彼の「英雄的・救世主的自己イメージ」と相乗的・相互浸透的に作用しあって、彼のカリスマの日常化を引き起こしていく要因のひとつとなったという側面にも注意しなければならない。詳しくは、瀬岡誠・瀬岡和子、前掲論文を参照。

23) 広瀬は、明治22年、62歳の時、妻幸、手島精一、高木玉太郎を同伴して欧米巡遊に出発したが、病気に罹り、予定をはやめて帰国した。「此の行や宰平、志気尚を壮なりと雖も、體軀已に老いたるを以て、自ら異郷風土の変換に堪へず、遂に米と英との両地に於て病に罹り、為に大に帰心を促志、漫遊豫定の期を短縮して帰朝するに至れるなり。」（『半世物語』168頁）とある。

24) 河合隼雄『「老いる」とはどういうことか』講談社、1997年、39頁。

しむ感情が生じる余地がない」という²⁵⁾。広瀬は、自分自身の「老い」に彼独自の新たな意義と価値を見出そうとして、「寿者国家之元気也」を書き、彼に固有の老人論を展開したともいえるであろう。

3 晩年のライフスタイル—「老書生」として

広瀬は、70歳から須磨に隠棲、「寿者国家之元気也」で展開した自説のとおり「不老長生の道」に努め、大正3年、87歳で没した²⁶⁾。子息広瀬満正は、隠棲後の父広瀬宰平のライフスタイルを次のように述べている²⁷⁾。

「先考は明治三十年以来須磨の別邸に起臥し、有用の賓入る可からずと掲榜して俗客を謝し、悠然自適の生活を楽まれたり。先考に詠楽五首あり、詠喜四首あり、賞花、玩月、読書、静坐、掃地、を五楽とし、静坐、緩歩、観畫、囲棋、を四喜とす。就中静坐、読書を悦び、老書生を以て自ら任じ、又、箕掃を執って落葉を掃ふこと、短帽長笻意に任せて緩歩すること、を、日課の如く為したまへり。」

このように、広瀬宰平は、「賞花、玩月、読書、静坐、掃地」と「静坐、緩歩、観畫、囲棋」を楽しみながら、悠然自適の静かな生活を送ったのである²⁸⁾。ここで注目すべきは、宰平が自らを「老書生」と呼んでいること

25) S. リンハルト (清田とき子訳)「日本社会と老い—遠望」(伊藤光晴他編『老いの発見1 老いの人類史』(岩波書店、1986年、257-280頁) 267頁。「吾十有五にして学に志し、三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順う。七十にして心の欲する所に従いて、矩を踰えず。」という孔子『論語』の言葉には、人間の知性には休止や後退はなく、絶え間なく前進し、進歩するという考えが表明されている。同書、同頁。また、河合隼雄によれば、孔子のこの言葉は、老いがライフサイクルの完成の意味をもって位置づけられているという。河合隼雄「老いの神話学」(伊藤光晴他編、前掲『老いの発見3 老いの思想』) 49頁。

26) 広瀬宰平の曾孫廣瀬つぎ子氏の回想によれば、宰平は、毎朝晴天の日には、須磨の別邸近くの綱敷天神へ杖をついて参詣したが、そのさい「海辺を歩きませず、わざわざ正面の石段を登って社殿に参詣致しておりました」という。広瀬つぎ子『半世物語』復刻に際してごあいさつ—広瀬宰平晩年の思い出—『半世物語』227-230頁。

27) 広瀬満正、前掲『宰平遺蹟』211頁。なお、引用文中の「詠楽五首」と「詠喜七律四首」については広瀬満正、前掲「偷間樂事篇以後之詩」の11-13頁および23-25頁を参照。

である。「老書生」という語は、広瀬の次の漢詩²⁹⁾のなかで詠まれたものである。

照将白髪対燈檠 寄意文詩眼尚明
 時吟吟聲驚半夜 余齡七十老書生

広瀬の漢詩の評者のひとり布岳上人（小栗憲一）は、「老書生熟語斬新」と述べているが³⁰⁾、この「老書生」こそ、広瀬が「寿者国家之元氣也」で展開したところの、「忠君憂国の士として不老長生に励む一老人」の具体的なイメージであり、人生の後半における広瀬のアイデンティティであったのではないだろうか。

Ⅱ 伊庭貞剛の老人論—「少壮と老成」の分析

それでは、伊庭は「老い」をどのように捉え、「老人の役割」をどのように考えていたのであろうか。

「はじめに」で指摘したように、この問題を考察する糸口は、58歳の伊庭が引退直前に発表した「少壮と老成」という一文が与えてくれる。その中で伊庭が述べた次の言葉、すなわち「事業の進歩発達に最も害をするものは、青年の過失ではなくて、老人の跋扈である」は、経営史や企業者史の研究書においてのみならず、新聞や雑誌においてもこれまでしばしば取

28) 宰平の曾孫広瀬つぎ子氏も、宰平の趣味が、漢詩、俳句、義太夫であったと述べている。また、宰平が創立に尽力した大阪商船の船が神戸沖合いを通るときは、須磨の自宅の「庭先まで出て眺めて」いたという。広瀬つぎ子、前掲『『半世物語』復刻に際してごあいさつ』228頁。

29) 前掲「偷閑樂事篇以後之詩」7頁。

30) 前掲「偷閑樂事篇以後之詩」5頁。なお、小栗布岳上人（1834-1915、大分県生まれ）は、20代の若き伊庭貞剛が司法官として東京に在住していたころから交流のあった人物である。伊庭が弾正台の官吏として長崎に出張したときも、当時還俗して明治政府に奉職していた布岳上人（当時は小栗憲一）が、伊庭の「下僚」として当地に滞在した。布岳上人の著書『懐旧詩史』（大正2年）の「標題」のなかには「貞剛愛禪」の語があることから分かるように、両者の交流は親密であった。『幽翁』94-96頁、瀬岡誠、前掲「広瀬宰平の企業者史的分析」52頁および57頁（注52）を参照。

り上げられてきた³¹⁾。そしてその際の強調点は、それがいわゆる出処進退の潔さを示す言葉として、また伊庭自身がそれを実行したことと関連づけて、彼の生き方や理念を高く評価するというものであった。

しかしながら、本稿では、伊庭が結論的に述べたこの言葉を単に指摘するだけではなく、そこに至るまでの彼の議論のプロセスに焦点を当てて引退当時の伊庭の意識を探ってみたい。そこでの彼の言説にこそ、住友時代における彼に固有のさまざまな経験が凝縮され、結晶化されていると思われるからである。そして、そうした個人的経験から彼が会得した、彼にとっての真実や信念が述べられていると考えられるからである。さらにいえば、「少壮と老成」は、「物を書き遺すといふことは大嫌ひで、詩や歌などの簡単なものでも、何ひとつ取纏めて保存されてゐない」³²⁾といわれる伊庭が、住友の二代総理事として一般に発表した貴重な「生の声」であり、その意味で伊庭の思想に関心をもつ者にとっては第一級の重要な史料であるといえるからである。

1 経験について

さて、「少壮と老成」における伊庭の議論の出発点は、老人（白髪）に対して敬意を払うべきであるということである。武士出身の伊庭は幼少時に、代官であった父伊庭正人から厳格な儒教教育を受け、武士道精神をたたき込まれたといわれるので³³⁾、年長者に対する尊敬の念は当然のことであったといえよう。

しかし、彼はその根柢、すなわち「老人の価値」を儒教道徳にではなく、老人の経験（＝「年の功」）に求める。老人の経験は、書物や金力で得られない、まさに「老人独特の珍宝」であるからだという。P. ブルデュー

31) たとえば、中野好夫「高風の財界人 伊庭貞剛」（佐高信編著『新・代表的日本人』小学館文庫、1999年）、中野孝次「明治の人、伊庭貞剛」（『文芸春秋 創刊80周年記念』平成14年2月号、368-369頁）、日本経済新聞社編『20世紀日本の経済人』（日経ビジネス人文庫、2000年、51-58頁）などを参照。

32) 『幽翁』203頁。

33) 『幽翁』65-66頁、および瀬岡誠、前掲「伊庭貞剛の企業者史的研究—準拠集団と西川吉輔の分析—」70-71頁。

流にいうならば、老人の経験とは、「少壮者に求めても得べからざる」、価値ある「文化資本」(cultural capital)なのである。

ちなみに、こうした「老い」の価値について、後年伊庭は次のように述べたといわれる³⁴⁾。

「壮年、老年、おのおの與へられた天分がある。壮年でなければ出来ぬことがあり、老年を用だてねばならぬことがある。

わかい者が出ては事が荒らだち、老人が顔を出すと、なにひとつむつかしい理窟を云はずとも、それで圓くおさまるといふ場合が、澤山世上にあ(る)ものぢゃ。」

さて、ここまでの伊庭の見解は、老人の経験の価値を高く評価する広瀬のそれと少しも変わらない。両者の見解が大きく異なっていく最初の分かれ道は、経験が両刃の剣であることを伊庭が強調するときである。少なくとも「寿者国家之元氣也」を見る限り、当時の広瀬は、老者の経験が、特定の歴史的社会的状況に規定された、その人に固有の経験であること、したがってその適用の仕方次第で「両刃の剣」となり得るのだということ、これらの点を伊庭ほど明確に認識していたとは思われない。老者の経験はつねに有用であるというのが、広瀬の議論の前提となっている。もっとも、広瀬の立論が、「老い」のポジティブなイメージを強調するに急なあまり、あるいは老者の経験の優位性と社会における老者の役割の重要性を強調するに急なあまり、老者と壮者の相互関係という視点を脱落させてしまったといえるかもしれないのであるが。

それはともかく、伊庭によれば、経験を重視しすぎると「とんでもない過失に陥ること」もあるのである。一般的な傾向として、老人は「何事につけても経験といふ刃物を振回はして、少壮者を威しつけ、なにがな経験者の意見に服従せしめよう」とし、他方、少壮者もまた経験という刃物の尊ぶべきを知っているので、老人の命令に「盲従する」場合が多いと指摘し、これこそ「大変な間違ひ」だと警告する。言い換えれば、文化資本としての経験も、その利用の仕方や状況を誤れば、負性が顕在化する、とい

34) 『幽翁』383頁。

うことである。

ここで伊庭は、改めて「経験」とはいったいどのようなものかという基本的な問題に立ち返り、それを社会学的に分析することにより、その警告の理由を明らかにする。しかも、それを彼自身の平易なことばで的確に表現しているのである。

すなわち、経験にもいろいろある。また、同じ商業上の経験でも、戦時か平時かでその意味も価値も変化する。つまり伊庭は、経験は時代や状況が変わればその価値も意味も変化する、その意味で、相対的なものであることを正しく指摘している。曰く「万事新陳代謝の世の中であるから、十年も二十年も前に獲た経験を何等の判断なしにそのまま押しつけようとするのは、だいたいまちがった話である」。

さらに注目すべきことがある。伊庭は、経験とは「自分で実験して始めてわかった」ことであって、他人からただ教えられただけの経験は「真実の経験」ではない、と述べている点である。ある人の経験とは、その人に固有の経験であるということだ。

この伊庭のことばは、禅の師であり心友でもあった橋本峨山との長年にわたる緊密な交流と、禅による自己鍛錬・自己修行につとめてきた伊庭自身の「経験」から自然に出てきたものであるように思われる。なぜなら、「禅にあっては各人の体験なるものが一切である」といわれ、その個人的体験が最も重視されるからである³⁵⁾。この点に関して鈴木大拙は『禅仏教入門』において次のように述べている。

「ある事物を最も明白に、最も有効に理解しようとするれば、それを各個人がそれぞれに体験してゆかねばならない。ことにそれが人生そのものに関した場合には、個人個人の体験が絶対に必要である。かかる経験なくして、決して事物の深いはたらきに関する何ごとも、的確に、したがって有効に把握することはできぬのである。すべての概念の基盤となるものは単純にして純真なる体験である。禅はこの基礎体験に最大の重点をおいている。」³⁶⁾

35) 鈴木大拙『禅仏教入門』新版鈴木大拙禅選集第7巻、春秋社、1991年、7頁。

36) 同書、同頁。

2 老少の内在的な対立関係

「経験」についてのこのような議論を踏まえた上で、伊庭は、一般に少壮者と老成者はもともと相互に対立する関係にあると論じる。

伊庭の考えでは、少々の危険や過失を恐れず、「敢為の気力」をもって「漸次経験を積んで行かう」というのが少壮者である。そのようにして得られた経験こそ「真実の経験」であり、それゆえに「貴重なる経験」なのである。もちろん、少壮者は「白髪を敬び、経験を貴ぶ念」をもたねばならないが、かといって、老成者が振り回す経験に盲従しては、「爺じみた因循姑息の若翁」になってしまい、その人物は最早それ以上発達することがない。

他方、老成者は、豊富な経験があるがゆえに、ときにそれが落とし穴となって、自分に対してのみならず、少壮者への誡めにおいても「保守的」になる傾向があるのである。伊庭の認識によれば、どの社会においても両者の「衝突」が見られるように、「老人の保守と少壮の進取」（企業者史的にいうならば、老人の伝統的・保守的な精神と少壮者の逸脱的・革新的な企業者精神）アントルブルヌールシップ というのはもともと「対立」関係を内包しているのである。

3 伊庭の信念―「老人は少壮者の邪魔をしない」

ここから先の伊庭の議論は、もっぱら事業経営の世界に焦点が当てられ、上述したような老少の対立関係をいかに調和的關係に変換していくかという点に集中する。そして、その方法に関して「老人は少壮者の邪魔をしないようにするといふことが、一番必要であらうと自分は信じてゐる」という彼の信念が表明されるのである。

伊庭が最も強調しているのは、事業が発展していくためには、「老少の衝突」を回避し保守と進取の「調和を図る」ことが大切であり、その調和を図る責任は老成者の方にあるということである。意見の対立や衝突は、双方に責任があるとはいえ、重要なことは、少壮者を「助け導いて行く位置にある」老成者は「注意役」に徹する（「経験を時勢に参酌して注意を與へる」）ということ、そして「実行役」である少壮者が「敢為果鋭の気力」を十分に発揮することができるように譲歩の精神をもつことである。

壮に対する老の経験と価値をとくに重視する広瀬の老人論との、2番目の大きな分かれ道がここに見られるであろう。

すでに指摘したように、広瀬の「寿者国家之元気也」からは、自らの経験の価値を確信する老人が不老長生に努力し、国家社会の危機には経験と注意力と忍耐力を発揮して壮者とともに舞台の表に立ち、彼らを指導していくという、能動的、積極的、行動的な老者のイメージ（老書生）が浮かび上がってくる。

これに対して、伊庭の「少壮と老成」からは、自らの経験の価値の相対性を自覚した上で壮者の革新性の発現を、いわば舞台の裏から注意深く見守る「注意役」に徹するという、寛大で包容力があり、どちらかといえば非行動的（passive）な老者のイメージが浮かび上がってこよう。

広瀬と伊庭の「老い」に関する議論から浮かんでくる、こうした対照的な老者のイメージは、伊庭の導師を務めた臨濟宗の師家山崎益洲の評価—広瀬が「厳であったとすれば、幽翁（伊庭）は寛のひとであった」³⁷⁾や、住友の常務理事であった川田順の両者に対する評価—広瀬は「力の人、策の人」であったのに対して、伊庭は「心の人、徳の人」であった³⁸⁾—とも符合するところ大である。ついでながら、優れた歌人でもあった川田は、80歳の伊庭の句「八十の耳あらたなり初からず」を評して、「いかにも満足して天を楽しむ老人の心持が、短い句に溢れている」と述べ、「まことに彼は娑婆世界の温かな傍観者であった（傍点は筆者）」と賛美している³⁹⁾。また、伊庭の心友であり、伊庭とともに住友家を引退した理事河上謹一は、伊庭のもつ「温かな感じ」「春風の如き感じ」に触れることの意味を奉天総領事時代の吉田茂に説いたといわれる⁴⁰⁾。

以上述べてきたように、伊庭は老成者と少壮者がそれぞれの社会的役割（注意役と実行役）を明確に認識し、それぞれがその遂行につとめること

37) 山崎益洲「幽翁の再刊を祝して」西川正治郎『幽翁』昭和27年版、所収。

38) 川田順『住友回想記』中央公論社、昭和26年、44頁。川田順については、瀬岡誠、前掲『近代住友の経営理念』53-55頁を参照されたい。

39) 川田順、同上『住友回想記』46頁。

40) 『幽翁』14-15頁。

が、結果的には両者の調和的關係を樹立することになり、それが事業の発展に結びついていくのであると主張したのである。そして引き出されたのが、「事業の進歩発達に最も害をするものは、青年の過失ではなくて、老人の跋扈である」という伊庭の結論であった。

「経験といふ刃物を振りまはして、少壯者をおどしつける。なんでもかでも経験に盲従させようとする。そして少壯者の意見を少しも採り上げないで、少し過失があると直ぐこれを押さへつけて、老人自分が舞台に出る」。これらは、伊庭のいうところの「老人の跋扈」的行為の一例とみてよいであろう。

4 「少壯と老成」執筆の意味と背景

「少壯と老成」は、伊庭が「事業の発展」ということを念頭において「老い」の問題や「老人の役割」に関する伊庭の考えを述べたものであるが、執筆当時の日本がおかれていた歴史的・社会的状況をも考慮に入れて理解されねばならない。つまり、「少壯と老成」が発表された明治37年2月は、まさに、日本がロシアに宣戦布告し、それから1年7か月の間続く日露戦争が始まったときであった。伊庭が住友を引退したのは、この一文を発表して5か月後の明治37年7月、日露戦争中のことであった。伊庭は同年10月28日付の子息伊庭簡一（当時ニューヨーク在）への手紙において、引退を決断した理由を次のように述べている。

「(上略) 日露戦争ト云ヒ今後経済界ノ波瀾ハイツ如何ナル変化ヲ顕シ来ルベキ、実ニ日本ノ経済ハ最モ慎重堅固ナラザレバ世界ノ波瀾ヲ乗越難キ事ト確信候故 (略) 彼是種々ナル事情ヲ綜合シ来リ、前途住友家ノ隆運ヲ企画、種々ナル実情アルニモカカワラズ、断然此処置ニ出タル事ニテ、大ニ経済界ヲ覚醒セシメシ次第ニ候。是即チ天命トモ云フ可キ乎。」⁴¹⁾

伊庭は世界における日本、日本における住友という意識をつねに保持し、高い国事意識＝「国忠のこころざし」をその理念の中核においていた。

41) 『幽翁』191頁。

「少壮と老成」における主張もそのような伊庭の国事意識を背景に展開されていることを忘れてはならないであろう。

ところで、伊庭は、住友時代から天龍寺の橋本峨山と禅を通じた深い交流を続け、引退後も、禅による自己鍛錬・自己修養を怠らなかつた。『幽翁』には、伊庭がいか「老」を尊び、「老」に満足し、「老」を喜んだかが繰り返し述べられている。伊庭の思想「晚晴」は「為る」ことによって開ける境地であるが、それは「老に透徹せる達人高士にあらずんば、到底これを極むるを許されざる心境そのものに外ならない」と言われる⁴²⁾。

伊庭は、住友時代からの禅の修養の過程を経て、「古い」のポジティブな意味と価値を味わう境地に達していたのであろう。広瀬が引退後に直面したであろうような「アイデンティティの再編」は、「晚成」ではなく「晚晴」をめざしていた伊庭にとっての課題とはならなかつたのかもしれない。伊庭にとって、より重要であったのは、「老」の心境が一步一步進展し「老の神髓」に近づいていくことであつた。そのことは、伊庭が自らの老の心境の進展に合わせて改号していることから知られるのである⁴³⁾。

むすびにかえて—峨山の「話」

以上、「寿者国家之元気也」における広瀬の老人論と、「少壮と老成」における伊庭の老人論を検討することによって、両者の「古い」についての考え方ないし老人の役割についての考え方に見られる相違点を、部分的にはあるが、明らかにし、加えて、両者がそうした老人論を展開した意味にも触れた。

そこで最後に、禅が伊庭の老人論に与えた影響と橋本峨山の興味深い「話」に言及しておきたい。

鈴木大拙によれば、「禅においては、他人の訓育といっても、われわれにできることは単に示唆を与えること、すなわち暗示してやること、弟

42) 『幽翁』 233-239頁。

43) 『幽翁』 293頁、瀬岡誠、前掲「伊庭貞剛の企業者史的研究—社会的基盤の分析」141頁以下。

子の注意が目標に向かって行くように、その道を示してやることでしかない。その目標に至り、悟りを得るのは当事者みずからがすべきことであって、他人が当事者の代りをしてやれるものではない」⁴⁴⁾のである。

老人は注意役に徹し、少壮者の邪魔をしてはいけないという伊庭の信念は、経験についての伊庭の議論に従えば、それまでの人生における、伊庭に固有のさまざまな「真実の経験」から彼自身が会得するに至った信念であるといえる。彼のそうした信念の形成に影響を与えたものとしては、心友橋本峨山との禅を通じた緊密な交流を挙げねばならないであろう。

いったい峨山は老人の役割や引退についてどのように考えていたのであろうか。

これについては、次のような興味深い話が残されている。文頭に「余」とあるのは南涯居士のことである。南涯居士とは、杉浦重剛の親友で膳所藩出身の永元愿蔵のことであり、当時住友本店に勤務していた⁴⁵⁾。

「余一日廣瀬幸平翁を須磨の別業に訪ふ 座に峩山和尚あり 其談ずるところ一場の世話に過ぎざれども趣味津々として盡ざるものあり 曰く人間四十といふ年頃は最も多方面に働き善く万事役に立つべき時なり 先づ僧家で云へば子僧の役でも番僧でも和尚の代でも皆相兼て出来得るなり 商家で云へば丁稚手代番頭は申すに及ばず主人の代となるも人が承知して受て呉れるのは四十位迄劫を経たるもの

44) 鈴木大拙、前掲『禅仏教入門』112頁。

45) 永元愿蔵は、安政2年、近江国膳所藩士の家に生まれ、幼時、杉浦重剛の父杉浦重文と岩垣月洲から漢学を学んだ。伊庭の盟友杉浦重剛は、永元を、同郷人のうち「多年の間、最も親密に何事も隔てなく交った」親友であると述べている。永元は、大阪朝日新聞社、京都滋賀新報社（のちの中外電報）を経て、明治20年、杉浦重剛の東京英語学校（のちの日本中学校）漢学教員嘱託となり、雑誌『日本人』の編集に従事、その後再び大阪朝日新聞社に勤務したが、同29年11月から住友本店に勤務することになり、家譜歴史の編集に従事していた。明治43年2月住友を退職、在勤13年のゆえに住友末家に編入された。天台道士「亡友永元南涯を憶ふ」（永元愿蔵『南涯遺稿』西川太治郎編、発行、大正11年、66-69頁、および「略歴」5-6頁）および瀬岡誠「伊庭貞剛の企業者史的研究—所有者と経営者の関係に焦点をあてて—」（『大阪大学経済学』第54巻第3号、2004年12月号）53頁を参照。なお、杉浦重剛（膳所藩出身、貢進生として大学南校に入学）、河上謹一、伊庭貞剛三者の間の高い連帯性については、瀬岡誠、前掲『近代住友の経営理念』83-93頁を参照。

ならざるべからず、されば我天龍寺の再建も愚禿が最も働き易き時
で仕合であった然るに五十六と云ふ年になると自から立働く時
代は過去り座して人を使用し監督するといふ風にならねばならぬ
老功を積み貫目のあるべき年輩者が壮丁の様にばた々立働く様では
老功も貫目もあったものでない云々（中略）（南涯居士誌）⁴⁶⁾

この話は、南涯居士永元愿蔵が須磨の別荘に広瀬宰平を訪ねた折り、た
またま居合わせた峨山の話が非常に興味深かったので書き記したものであ
る。広瀬は、「禅話に於て禅師（峨山—筆者注）を方外の友として相交は
ること久し」⁴⁷⁾ かったといわれる。

文中に「我天龍寺の再建も愚禿が最も働き易き時で仕合であった」とあ
ることから分かるように、この話が広瀬になされたのは、峨山が広瀬の協
力を得て天龍寺再建事業を終えて後のことである。したがって、明治31年
から峨山が死去（48歳）する明治33年の間と考えられる（即ち、広瀬が
「寿者国家之元気也」執筆後のことである）。

峨山は、「世事の談笑を以て百の説法にかへてあられた」⁴⁸⁾ といわれる
ので、この話もそのようなものとして語られたのであろう。とすれば、
「老功を積み貫目のあるべき年輩者が壮丁の様にばた々立働く様では老功
も貫目もあったものでない」というのは、当時70歳を超えていた老成広瀬
に対して、年輩者はいかにあるべきかについて語った言葉ではなかったか。

さらに『峨山逸話』には、「井上某の談」として出処進退の潔さに関する
次のような話も載せられている。峨山は「進むを知って退くを知らざる
は野人なりと云はれたことがありました 此れも此頃の人は退くことを知
らぬでいけん 何をやるにも退くと云ふことが大事ぢや 古人は進む時には
ドシドシ進んで退く時はズッと退いた（下略）」と⁴⁹⁾。

46) 深山一郎編輯『峨山逸話』深山一郎発行、明治34年、27-28丁。

47) 広瀬満正、前掲『宰平遺蹟』214頁。

48) 『幽翁』247頁。明治27年、別子銅山事件を解決するため単身別子に向かう伊庭が峨
山から臨濟録を渡されたとき、「法のことは何ひとつ聞かなんだが」と言うと、峨
山は「会ふたびにあんなにどっさり云ふてきかしておいたに」と大笑したといわれ
る。同書、246頁。

49) 深山一郎編輯、前掲『峨山逸話』25丁。

既述のように、広瀬が住友家15代家長友純に「具陳書」及び「副書」を提出して、後継者伊庭の煙害問題解決案（製錬所の四阪島移転案）に真っ向から反対したのは、彼が引退して2年後の明治29年、69歳のことであった。

具陳書を書いた当時の広瀬の内面を類推すれば、次のようになろう。すなわち11歳から別子銅山に勤務し培った技術的知識と、初代総理事として今日の住友の発展の基礎を築いたという自信と経験、さらには住友家への深い忠誠心（「逆命利君謂之忠」）に基づいて、「国家の元気」である老人の役割を果敢に遂行すべく、住友家の将来に重要な影響を及ぼすであろう製錬所の移転案を断念するよう、反対案を15代家長友純（および伊庭）に上申した行為である、と。

一方、伊庭の老人論から当時の彼の内面を推測すれば、次のようになろう。すでに住友を引退した老人広瀬がとったこの行為は、それがいかに住友家に対する忠誠心から発していようと、老人の役割（＝「注意役」に徹する）を逸脱した行為であり、「老人自分が舞台に出」たという意味において「老人の跋扈」的行為に当たるであろう。とくにこの場合の一方の当事者ともいえる少壮者伊庭は、広瀬の後継者として、「国忠のころごし」のもと、家長との間に調和的關係を築きつつ、重役会による合議制に基づく経営体制を確立していかねばならないときであった。したがって、叔父であり前総理事であり、終身分家の上位に位置する広瀬のこの行為は、当時の伊庭からみれば、「経験といふ刃物を振りまはして」少壮者伊庭の決断を「牽制束縛する」⁵⁰⁾行為、すなわち「老人の跋扈」的行為のように思われたのではないだろうか。

そして、伊庭の心友であり、広瀬にとっても「禪話」における「方外の友」であった峨山にすれば、すでに住友を引退して2年になる老人広瀬のこの行為に、「老功を積み貫目のあるべき年輩者が壮丁の様にはばた々立働く様」を見、老成者のあるべき姿や出処進退の潔さの重要性を談笑として説いたといえるのではないだろうか。

50) 『幽翁』189頁。

[付記]

本稿作成のプロセスにおいて瀬岡和子の協力があったことを明記しておく。